聴覚障がい のある子の 命を守る防災 活動マニュアル









「聴覚障がいのある子の命を守る防災」の取り組みについて

「ママコミュ!ドットコム」は、子育て当事者の視点と思いを生かし、すべての子どもが幸せに豊かに暮らせるまちづくりをめざして2013年から大阪市内を中心に活動しています。

特に、成長と共に親と離れて過ごす時間が増える子ども期を防災教育のスタート時期と考え、親や大人と一緒にいない時に災害に遭遇したとしても自分の命を守り切ることができるだけの知識とスキルを身につけられるよう、特に15歳以下の子どもと保護者を対象にした防災教育活動に取り組んでいます。

2018年の大阪北部地震は通学時間帯の発災であったこともあり、通学途上で地震を経験した子どもが多く、通信や交通の混乱の中で電話がつながらない、子どもがいる場所がわからないなど、多くの保護者が不安を経験しました。

中でも、聴覚障がいのある子どもたちは、平時から情報収集・伝達の面で聴者に比べて多くの困難を抱えているだけでなく、災害時は一層深刻な命の危機に直面します。防災に関する専門的な知識や経験を持つ私たちが、聴覚障がいのある子どもたち自身はもちろん、保護者や支援者の方々と同じ目線に立ち、災害時の避難行動やその後の生活において見落とされがちな課題を明らかにするため、本事業を企画しました。

また、正確な情報入手や伝達のために子どもたちが活用している具体的な方法やツールを知ることで、聴者の立場から適切な情報発信を行い、共助の促進に導こうと考え、一連の活動の内容をこの一冊にまとめました。

聴覚障がいのある子ども自身はもちろん、ご家族や支援者の皆さまにとって、平時からの備えの 強化に資するものであれば幸いです。

末筆になりましたが、大阪府福祉基金様の助成をいただきましたことに心よりお礼申しあげます。

目 次

Ⅰ 活動報告・アンケート

- **(1)「聴覚障がいのある子の命を守る防災」勉強会 p2-6** 2021年11月15日(月) オンライン(zoom)
- (2) 聴覚障がいのある子のための防災講座(小学校低学年、高学年、中高生) p7-9 2022年2月26日(土)、28日(月) オンライン(zoom)
- (3)**聴覚障がいのある子の防災体験(防災のチカラ)** p10 2022年3月13日(日) うめきた外庭SQUARE(大阪市北区)

II 「聴覚障がいのある子の命を守る防災」の今後に向けて p11-15

- ~聴覚障がいのある子の支援者アンケート(2022年3月集計)の結果から~
- 一般財団法人大阪市コミュニティ協会 都市コミュニティ研究室 主任研究員 出水 季治 氏

1 「聴覚障がいのある子の命を守る防災」勉強会

2021年11月15日(月) 16:00 ~ 17:30 オンライン(zoom)

この講座は、誰一人取り残さない災害に強いまちづくりを目指し、開催しました。 「災害時に聴覚障がいのある子と家族が直面する状況とリスク」にフォーカスを当て、私たちができる支援や共助の可能性 について考えます。

講師は、防災・減災の研究者のお立場から大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授、同大学都市防災教育研究センター副所長の生田英輔先生と、聴覚障がいのあるお子さんの親の立場、ろう・聴覚障がい者のコミュニケーションの研究者でもある日本福祉大学大学院の安田喜一先生のお二人をお招きし、お二人のご専門分野からお話を伺いました。

第1部「障がいのある子が抱える災害リスクとは」

防災とは

防災とは、Damage(Risk):被害(人的、物的)、Hazard:災害の原因(地震、台風、豪雨、津波、高潮など)、Vulnerability:脆弱性(物的、社会的)、Countermeasure:対策(ハード、ソフト)により、D(R) = H,V,Cの関係で決まります。

被害には、人的被害と物的被害の二つがあり、物的被害には 復元が可能なものもありますが、人的被害(とくに命)は一度失 うと取り戻すことができません。防災の一番の目的は「命を守 る」こと。つまり端的に言うと「人が死なない」ということで す。そのために防災があり、人的被害の抑止が求められます。

そのために、さきに示した関数D(R)=H,V,Cで言うと、Hazard:原因は変えられませんが、Vを低下(物理的には住宅の強化、社会的にはコミュニティの強化など)、C(ハード面では耐震化、家具固定など、ソフト面では防災訓練や教育)を充実させることにより、災害で人が死なないための対策を充実させることが可能になるのです。

なぜ高齢者・障がい者の被害が多いのか

阪神・淡路大震災の人的被害の特徴を見てみると、高齢者においては身体機能の脆弱性、運動能力の低下、大学生などの若年者においては住宅の脆弱性が主な原因でした。また、平成28年台風10号や東日本大震災における岩手県の被害事例を見てみますと、「物理的脆弱性(リスク)」が高い場所に「身体的脆弱性の高い人(高齢者)」が生活しており、脆弱性が重なるとリスクはより高くなると言えます。

同様に、個々の事例において何が脆弱であったかを細かに 分析する必要はあるものの、障がい者の死亡率が高いという 調査結果(毎日新聞調べ)もあります。また、情報入手力・情報判 断力等に加え、コミュニティの支援者の有無にも関係してき ます。

また、障がい者自身があきらめてしまうという意識もあるのかと思います。

情報による支援

直接的な避難支援に目がいきがちですが、情報による支援が実は災害弱者や災害時要支援者の定義でも沢山触れられています。災害発生時の情報だけではなく、平常時から情報を提供する、あるいは情報をもらう、双方向で情報共有しておくことが大事であり、支援のコミュニティを作っておく、それによって実は災害時に役立つことが多いのではないかと考えます。

大阪府下全自治体を対象とした調査(きょうされん大阪支部調べ)によると、エリアメールや自治体ホームページ、行政無線で情報を伝えていくというのはできているわけものの、自主防災組織やSNSを使って要配慮者に平時から情報伝達体制を作っておくことはこれからの課題として指摘されています。

大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授、 同大学都市防災教育研究センター副所長 **生田英輔**先生



「災害時要配慮者等」の定義の変遷

災害時に支援を必要とする人を表す言葉について見てい きます。

「災害弱者」という言葉が出てきたのが約30年前(平成3年防災白書)。自分の身に危険が迫ったことを察知できないあるいは伝えられない、情報を受け取ることが出来ない、そして行動できない人のことを定義したのが始まりです。

その次に出てきたのが「災害時要援護者」という言葉です (平成16年防災白書)。高齢者、障がい者のほか、外国人や乳幼児、妊婦などが定義に加わりました。その後「災害時要配慮者」(平成25年~)や「避難行動要支援者」(平成25年~災害対策基本法)という言葉が出てきています。

このようにここ30年ほどの間に障がい者などの災害時の課題に対する対策は進んできているわけです。の対策を充実させることが可能になるのです。

防災訓練に参加している要配慮者は少ない

同じ調査から、地域の防災訓練に参加している要配慮者が 少ないことがわかります。

特に聴覚障がい者に関しては43市町村のうち4市町村にとどまっています。車いす利用者や杖を使っている人は要配慮者としてイメージしやすいですが、その他の要配慮者が参加できる事例はまだまだ少ないと感じています。

私の研究室で関わっている視覚障がい者の避難実験で、災害時の状況を再現して視覚障がい者には白杖なし、晴眼者にはアイマスク着用で比較したところ、視覚障がいのある人は避難時に障がい物があることが避難速度を落としてしまうという結果が得られました。加えて自宅からの避難経路を把握していない人の割合が非常に高く(あきらめか)、対応が必要だと考えています。

まとめ:「脆弱性」と「情報支援」

「出来ないこと」に対する考え方や工夫を身につけること、 具体的な避難行動や避難所生活を想定した訓練を経験する こと、学校・職場以外の人だけでなく普段関わらない人と関 わっていくことによって災害時の対応力を増やしていくこ とが障がい者の防災において大事かなと思っております。

第2部「聞こえない・聞こえづらい子ども」の命を守る社会に向かって



日本福祉大学大学院 **安田喜一**先生

次男の誕生、親の思い

私の次男は1995年に誕生、名古屋市にある社会福祉法人のB型作業所に勤務する、先天性ろう者で知的障がいを併せ持つ重複障がい者です。医師から聞く医学的データは悪い内容ばかりで、次男(26歳)の出産直後の妻にどこまで本当のことを伝えるかべきか悩み、ずいぶん辛い一週間を泣きながら過ごしました。

そこでたどり着いたのは、「この子と人生を楽しもう」と考えたことです。そして考え方を前向きに変えると賛同者・協力者も現れました。

聴こえる術を探って世界を巡った

「どうしたらこの子が聴こえるようになるのか」。そのためなら誰とでも会おう、何処へでも行こうと考え、世界中を飛び回り、医療的治療による聴力補正はないか探して回りました。 補聴器や人口内耳など聴力補正も検討しました。イギリスやドイツでは補聴器を一つのファッションととらえ、隠す事なくデザイン性を兼ね備えたものとして「見せるもの」であることも知りました。

結果的には聴力の補正が不可能なことを知り、「ろう者」と して生きていくことにしました。

子どもの成長、進学、進路について

小学校進学に際し、聾学校か近所にある学区の小学校が良いのか、何度も訪問を行い、障がい児教育に熱心な先生との出会いがありました。1年生、2年生は学区の小学校に通い、妻が手話通訳として毎日学校に同行し、息子も楽しい学校生活を経験することができました。3年生からは聾学校に転校しました。その理由は聾学校で気が合う校長先生との出会いがあり、毎日150キロを妻が車で送迎してくれました。

中学部進学では、本人が自身で選択しました。次男が気の合う先生と出会えたことが親にとって気持ち的にずいぶん楽になることが出来ました。親子共に「自分と気の合う先生を見つけることが気持ち的にも随分楽になった」ということを感じました。

聾学校高等部に入学し、就労について考えるようになりましたが、就職では色々な社会福祉法人を多数訪問したり施設を見学したり、就職セミナーにも参加しました。ある社会福祉法人は、志も高く素晴らしいものでしたが、私には何か物足りない感じがありました。友人から障がい者雇用に熱心な大手企業を教えてもらい、事業所も訪問しましたが、ここもピンときませんでした。

色々な施設を見学した結果、息子はB型作業所に入所することになりました。聴覚障がい者の就職は非常に厳しく、国立大学を卒業しても厳しい現実があることも知りました。

ろう者の父親としての活動 聞こえない学生の支援

聞こえない学生への支援のため、AI音声認識文字変換システムの導入支援を精力的に活動しながら正しい日本語を教え、学ぶことが大切であると思います。

ろう者の母語は「日本手話」であり、ろう者は日本手話で話すことに誇りを持っていることから、工学院大学では先天性ろう者の言語に関する研究を行いました。手話と文字情報を組み合わせることにより、ろう者の日本語能力が向上し、社会での孤立防止につながると考えています。このシステムは県下の聾学校で実際に使われています。

聴覚障がいとは

聴覚障がい者とは、先天性ろう者、後天性ろう者、難聴者、 中途失聴者に分類されることが一般的ですが、このセミナー では先天性ろう者を指すと考えています。

先天性ろう者は生まれた時から音の存在を知らず、音による情報収集過程がありません。母語は手話。日本語でのコミュニケーション自体が困難で一般就労も大変な場合が多いです。

一方、聴者は保護者や家族が話す言葉や音情報から母語である日本語を覚えることが容易です。また、聴覚障がい者は視覚障がい者より就労が難しいと言われていますが、それはろう者と聴者で母語が異なるためコミュニケーションが難しいためだと言われています。

聞こえない子どもの防災と命を守る方法

聞こえない人にとって一番の問題は対面でのコミュニケーションが難しいという点です。外見で聴覚障がい者であることを聴者に判断してもらうことが難しい。ろう者は近所づきあいが苦手であって災害時に取り残されるのではないかと不安に思っています。

ろう者のコミュニケーションツールに関する調査(2016年)を行った際に、FAXは根強い人気があり、携帯電話、スマホが幅広く使われていて、テレビ電話(今ならzoom)も使われていました。ろう者の場合は視覚情報を重視していることを確認しました。

聞こえない子どもの命を守るうえで重要な「共助」は聞こえない人にとって弱いと思っています。聾学校や学校での時間は先生方に保護されている時間ですが、問題なのは学校を出た後です。愛知県の調査で聞こえない子が誰を頼るかを見ると親、きょうだい、友人に比べると近所の知人を頼るとした人が全体の1割にも満たないことがわかります。

まとめ:災害時にろう者が抱えるリスク

ろう者はコミュニティとの繋がりが薄く狭い関係性、 情報不足と偏りが心配です。よって孤立や不安な生活に陥 りやすいと考えます。

愛知県は自動車関連会社が多く、聞こえない人のコミュニティが確立されていることが多く、安心要素もあります。 ろう児、難聴児を災害から守る最大のポイントは、自分

ろう児、難聴児を災害から守る最大のポイントは、自分が聞こえないことを聴者にスムーズに伝える方法・力を親は子どもに教えることで、そのためには、「正確な日本語の獲得」が子どもたちの命を守るひとつと考えています。

第3部 質疑応答•意見交換

先生方のお話を踏まえて、参加者のみなさまが普段の活動の中で感じられたこと、 疑問やご質問をお聞きしました。

進行

(一財)大阪市コミュニティ協会 都市コミュニティ研究室 主任研究員 **出水季治**氏



質問1

人工内耳の問題点について教えてください。

安田先生: 人工内耳をつけると自分が聞こえないということを忘れてしまうことです。人工内耳でも聞き取れないこともあるので、自分がろう者だということをわかっておいた方がいいと思います。ろう者の母語はあくまでも手話だと思っているので母語を大切にしてほしいと考えているからです。

質問2

障がいの方に自分の身を守ることを教えていくにはどうしたらよいでしょうか。

安田先生: 聴覚障がい児の場合は、「自分は聞こえない」ことを周りの人に伝えることが大切だと思っています。 息子が幼い時から、聞こえないことを近所の人たちに知っていただき、ジェスチャでもいいのでコミュニ ケーションを取ってほしいとお願いしていました。そのうちに近所の人が手話を教えてほしいとおっしゃり、 今では互いにコミュニケーションが図れるようになりました。近所に住む外国人も外国の手話で話しかけて くれたり、息子を中心に新しいコミュニティが出来ています。

生田先生: 聞こえないことを伝えるバンダナを普段の防災バッグに入れて避難行動の際にも肩からさげて周りにアピールするのも大事かなと思います。災害時には聴覚から得られる情報が大事で、阪神・淡路大震災の時も揺れよりも音で地震に気づいた人が多かったことから、聴覚障がいのある人も普段から防災施設で地震の模擬体験などをしておくとよいと思いますし、災害時の最初の第一歩で何とかして生き残ることを考えてほしいと思います。

質問3

自閉症と知的障がいのあるわが子のためにサポートカードを作っています。聴覚障がいのある子の役に 立つカードも作っているが、(現物を見せながら)何かアドバイスを頂けますか。

安田先生: いいアイデアだと思います。聴覚障がいのある子にも、文字よりもイラストを多用した方が分かりやすいのではないでしょうか。その方が外国人の方でも誰でも分かるので汎用性もあると思います。

生田先生: 避難所にはいろいろなニーズがあり、最近の感染症対策も加えるとマニュアルが多すぎて覚えきれない状態になっています。マニュアルを整備するだけでは十分ではなく、ゲームなどの体験型に発展させるのもよいと思います。避難所を運営される地域の人の中には子どもの対応が得意な方や語学が得意な方もおられると思いますので、そうした人材を事前に発掘しておいていざという時に協力してもらうとよいのではと考えます。

まとめ: みんなが助かるために

障がいのある人と災害時に避難所運営に携わる人が普段からお互いの状況を伝えあうことが大事。 安田先生の住む地域では息子さんが実際にモデルになって救助訓練をしたことがあるそうです。 そして、聞こえない人全員が手話ができるとは限らないので、平時から聴者とろう者が日本語を共通 語としてコミュニケーションを取っておくとよいとのことです。

「聴覚障がいのある子の命を守る防災」参加者へのアンケート調査結果 2021年11月15日(月)

当日参加者及び録画配信を視聴した方々に対し、

事業評価と今後に向けたご要望などをお聞かせいただきました。[回答総数25件]

①本日の講座を何でお知りになりましたか?(複数回答可)

主催者(ママコミュ!ドットコム)から	共催者(中央区フィランソロピー	懇談会)から	大学、学校等	等から	登壇者、関係	者から	その他	
・ホームページ	3	・クチコミ	6	・クチコミ	3	・ホームページ	ブ …1	•SNS	2
•SNS(Facebook、ツイッターなど)	7	・メールマガジン	1	・その他	…15	•SNS	1	・クチコミ	…1
・クチコミ	3	・その他	10			・クチコミ	3	・その他	…12
・その他	7					・その他	…10		

③講座全体の評価をお聞かせください。(5を最高点とする5段階)

...4 7

4 - 1 第1部の生田先生のお話はいかがでしたか?(5を最高点とする5段階) …4.7

4 − 2 その理由をお聞かせください。(自由記述)

- ・全体像が整理されていました
- 分かりやすいお話でした。
- ・また新たな知識の習得につながった
- ・災害に対する備え方、対策の仕方はどんな人も平等に必要であることの理解が深まった。
- ・災害時に大切なことがまとまっており、シンプルに伝わりました。
- ・災害時要配慮者などの定義の変遷について勉強になりました。また、普段から地域の人々と交流することが大切だと改めて実感しました。
- ・防災に関する全般的な説明から始まり、その後の考え方のもととなったから
- ・居住安全工学のご専門ということもあり、ハード面の備えの大切さを阪神淡路大震災で多くの若者がなくなった(これは存じませんでした)痛ましい事例を通じ、痛感しました。
- ・コミュニティ(人間関係)を強固にすることに最近意識が向きがちでしたが、ウィークポイントを低下させることの基本中の基本に気づかせていただきました。ありがとうございました。
- ・具体的な事例が、分かりやすかったと思います。
- ・防災被害について整理されたお話で理解しやすかった。
- ・現在、市が国の事業で「個別避難計画」を受けて、部会を作りその部会長をしています。災害時要支援者と行っても様々な方が居られ、そのお一人お一人に向き合いその方に有った避難計画造りを行っていますが、要支援者本人の自覚がない方(危険だと思って居ない、放つて居て欲しい)も多く居られますが、地域の自主防災組織を中心に地域住民、民生委員、包括支援センター、ケアマネ、介護施設等の協力の下進めています。

その中で、障害のある方本人や家族が出来ること、備える事が大事であることを再認識致しました。但し、情報提供に関しては役員までは SMSで行っていますが、今後理解を得た上で進めていければと思っています。

- ・災害弱者への情報点達の重要性と自助意識の啓蒙の必要性を再認識しました。
- ・阪神も東日本も被災経験がありますが、知らなかった要因にかかるお話など参考になりました。

⑤ - 1 第2部の安田先生のお話はいかがでしたか?(5を最高点とする5段階) …4.7

⑤−2 その理由をお聞かせください。

- ・具体的でよかった
- ・自身の障がいがある子を育てる中での「地域で育てる」子育て観を元にした防災のお話に共感した。
- ・分かりやすくて勉強になりました。
- ・聴覚障がいのご家族の方から、平時の地域との関わり方についてのエピソードが伺えたことが大変有意義でした。

- ・当事者として説得力ある実際のお話が腑に落ちました。
- ・災害が起こったときに聴覚障がい者にとっては文字情報はもちろん、視覚的情報も必要だと思いました。
- ・項目が多すぎて、内容的に薄い感じがした。絞り込んで話していただいた方が良いのでは
- ・聴覚障がい者の方の母語は日本語手話ということで、この感覚をそもそも理解できていませんでした。口の動きやジェスチャーで何とかなる、と甘く考えていた自分が恥ずかしくなりました。でも最後に安田先生がいざとなったらジェスチャーでもいいんです、伝える気持ち、ということをおっしゃっていたので少し気持ちが楽になりました。
- ・手話、学びたいと思いました。あと私はデザイナーあがりですが、ビジュアルなどで伝えるということは有効なんだとわかり、デザイン の力で何かできることがあるのではないかと思いました。
- ・周りに聴覚障がいのあるお子さんをお持ちのご家族がいらっしゃるので、当事者家族の先生のお話を聞くことが出来て勉強になりました。
- ・実感が伝わりました、当事者としての迫力がありました。
- ・リアルな体験談で、親の悩み気持ち、切り替え等が少しだと思いますが、理解出来ました。
- ・安田先生のご努力には頭が下がる思いです。AI音声認識文字変換システムは、避難所に於いても十分活用で来るのではないかと思っています。また「正確な日本語の獲得」は健常者に於いても同じ事が言えるのではないかと思います。
- ・日本手話と日本語対応手話とがあって、全く別物であるとのこと。多分基本的な知識としてこういうことが必要なのだと思った。
- ・当事者のご家族のお話を伺うのが初めてで、学校の決め方や聞こえることを願って方法を模索された経緯などありのままの内容が非常に迫るものがありました。また、聴こえる人に聴こえないことをどう伝える術を持つのか、そのための正しい発音を身につけることの重要性を説かれていましたが、逆の立場で、聴こえる人が聴こえない人と話せるツールや方法をライフスキルや常識として持っていくことも同じように必要だなと。そうしたことを教える機会も学ぶ機会も自然にはできていない日常の中の不足も感じました。でもここは埋めていけることでもあるので、今回のきっかけが非常にありがたく感じています。

⑥ 1 第3部の質疑応答と情報共有の時間はいかがでしたか?(5を最高点とする5段階) …4.6

6-2 その理由をお聞かせください。

- ・発達障害の子のためのカードを作っている人がいたことに感心しました。
- ・講義以外の内容が広がった。皆さんからの質問やご意見を伺えたからです。
- ・ファシリテートがスムーズで、質疑応答も的を得ていて、聞いてるだけでも参考になりました。
- ・それぞれの考え方について勉強になりました。支援者としては、災害時の対応方法を改めて考え直す必要があると実感しました。
- ・オンラインでの進行に苦労があったと思いますが、参加者の行儀も良くスムーズに進行できていた。
- ・自身がとっさに質問できなくて申し訳なかったです。でも他の方がとても良い質問をされ、それによりまた学びが広がってよかったです。
- ・非常にシビアな課題で質問できる知識がありませんでした。他の方達からの質問が聞いてみたかったです。
- ・質問をさせていただき、明快な答えがいただけてよかった。
- ・色々な視点での質問をお伺いできたのでよかったです。人工内耳のことなどもここでしか触れる機会がないので、どのご質問も貴重でした。

で意見、ご要望などがあればお書きください。

- ・貴重な場をもうけていただき参加させていただけて感謝しております。
- ・堅苦しくなりがちな防災のお話を、一般の人にも分かりやすくシンプルに伝えて下さったので私にも理解できましたし、
- 大変参考になりました。貴重な機会を作っていただき有難うございました。今後もぜひ、こういった講座がありましたら参加したいです。
- ・できれば、実際に災害を経験された障がい者のお話を伺いたいです。
- ・総論、各論とシリーズで開催していただくと良いと思える。また、初期避難に関しても、皆が避難所に行くことを前提としているように感じられたが、自宅で 特にマンションでは自宅避難も考えられるので、その部分も触れてほしかった。今後もこのような取り組みを進めてください。
- ・違うテーマでも参加してみたいと思いました。
- ・防災で手話・筆談の話がありましたが、視覚で知らせる防災対策をもっと知りたいと思っています。今回は有意義な講座、有難う御座いました
- ・今後の取り組みにも注目しています。
- ・誰1人取り残さない、と言葉はありつつも、本当にその真髄に迫る企画に関心を持って参加させていただきました。聴覚障がいを学べば、 視覚障がい、身体障がい、認知症などなど、色々な立場の方の防災にも意識が向くようになります。また、企画があればお知らせください。
- ・Zoomなので遠方からでも参加できるメリットを享受させていただきました。お声がけありがとうございます。
- ・事務局のみなさんご苦労さまでした。

🤈 聴覚障がいのある子のための防災講座

2022年2月26日(土)、28日(月) オンライン(zoom)

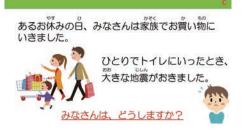
デフアカデミー(大阪市中央区)に通う小学校低学年、小学校高学年、中学生・高校生及び家族を対象に、3つのグループに分けて防災講座を実施しました。

講師1名(聴者)、手話通訳1名(聴者)、コーディネーター 1名(ろう者)の進行により、スライドを見ながらゲームやクイズを通じて楽しく防災を学んでもらいました。

小学校低学年対象 2月28日(月) 参加者9名

「災害は大人にも子どもにもやってくる。だから子どもにこそ防 災のチカラが必要なんだよ。」というメッセージから講座が始まり ました。

スライドを用いながら子どもたちが知っている災害の種類について一人ひとりに紙に書いて発表してもらったり、右のような場面において、子どもたちはどんな行動を取るのか、一人ひとりから答えを引き出しました。



小学校高学年対象 2月26日(土) 参加者4名

災害はいつ起きるかわかりません。そしてその時に何をしている かも誰も予測できません。

「いつどこゲーム」(制作:ママコミュ!ドットコム)を使って、あるシチュエーションを選択し、その時に地震が起きたらどう行動するのかを考えました。

「2月のとある金曜日の朝7時30分」には、朝食中、登校準備中、通 学途中など、子どもたちの行動が異なりました。

色々なシチュエーションを想定し、災害時のとっさの行動につな げることが大事です。

2月 金曜日 朝 7:30

中学生・高校生対象 2月26日(土) 参加者2名

災害時に起こり得る様々な事柄への対応力を培う防災カードゲーム「なまずの学校」(制作:プラス・アーツ)を使って、ケガをした子どもを救う方法を考えました。

イラストに描かれた身近にあるモノを使うほど点数が高いこの ゲームはとっさの判断力や機転を養うのに効果的です。



講座の中での工夫(一例)

「どんな災害を知っていますか?」という講師の質問に対し、子どもたちが答える場面で、ろう者のコーディネーターの先生が「例えば地震も災害だよね」と手話を交えて伝えると、「じゃあ津波や台風とかも災害?」と子どもたちが手話でどんどん答えを出してくれました。

イラストだけでなく、質問の繰り返しや少しニュアンスを変えて質問しなおしたり、例示をすることにより、子どもたちの理解がより深まるという点は聴者に対しても同様ですが、聴覚障がいのある子にとっては一層必要な工夫だと感じました。

また、コーディネーターの先生が子どもたちの名前や「見ます」、「考えます」といったカードを用意し、画面で見せることで発言のタイミングや今必要なことは何かを正確に理解することができました。小学生はチャット機能を使うより、こうした方法がスムーズだと感じました。

聴覚障がいのある子の保護者、支援者への アンケート調査結果 2022年2月26日(土)~3月31日(木)

2022年2月に行った聴覚障がいのある子のための防災講座に参加した子の保護者に対し、 講座の感想に加え、情報入手や伝達の方法、防災教育に対する意見を聴取しました。 [回答総数15件]

● 回答者(保護者)の属性

•男性	0	・ろう者	2	•30代	5	•父親···	0
•女性	15	•聴者	13	•40代	9	•母親	15
				•50代	…1	•兄弟姉妹	0
						・いとこ、祖父母、おじ、おば …	0

②聴覚障がいのあるお子様の学年(複数選択可)

•小学校低学年(1年~3年)	9	•中学校	3
•小学校高学年(4年~6年)	…4	•高校	$\cdots 1$

③聴覚障がいのあるお子さんの防災講座、防災訓練の経験について(複数選択可)

・住んでいる地域で行われる防災訓練に参加したことがある	$\cdots 1$
・通っている学校で行われる防災訓練に参加したことがある	11
・通っている支援施設で行われる防災訓練に参加したことがある	…4
・今回のように民間団体主催の防災講座に参加したことがある	1
・家庭内で避難訓練や防災について教えている	3
・一度も参加したことはない	1

◇聴覚障がいのあるお子さんを含め、ご家族で近隣の方とどのような関係性をお持ちですか?

・ご近所の方にお子さんの状況を伝えている…9・区役所の担当者にお子さんの状況を伝えている…3・町内会や地域団体の方にお子さんの状況を伝えている…1・子どもの友達の保護者にお子さんの状況を伝えている…10・マンションの理事会、管理会社にお子さんの状況を伝えている…3・親しい身内にお子さんの状況を伝えている…9・特に伝えていない…3

⑤聴覚障がいのある子の防災力向上について何を望まれますか?(複数選択可)

・住んでいる地域で聴覚障がいのある子に対応した防災訓練をしてほしい	2
・通っている学校でより多くの防災訓練や講座を開催してほしい	9
・通っている支援施設でより多くの防災訓練や講座を開催してほしい	3
・民間団体が聴覚障がいのある子に対応した防災訓練や講座をもっと多く開催してほしい	١ ···4
特に望むことはない	1

⑤聴覚障がいのある子の防災力向上のために欠かせないことは何ですか?(複数選択可)

・聴覚障がいがあることをもっと周囲の人が理解し、配慮してほしい	7
・聴覚障がいの有無にこだわらずに接してほしい	9
・地域の防災訓練に聴覚障がいの当事者の意見や要望を取り入れてほしい	6
・通っている学校の防災訓練に聴覚障がいの当事者の意見や要望を取り入れてほしい	7
・通っている支援施設の防災訓練に聴覚障がいの当事者の意見や要望を取り入れてほしい	2
・民間団体が実施する防災訓練や講座に当事者の意見や要望を取り入れてほしい	3
・特に意見はない	$\cdots 1$

⑦聴覚障がいのあるお子さんが日常生活でよく使う情報入手ツールは何ですか?(複数選択可)

・友人・知人からのLINEメッセージ	8	•Yahoo !ニュースなどのニュースサイト	5
・FacebookやInstagramなどのSNS	…4	・テレビ	…6
•YoutubeやTikTokなどの動画	13	・聴覚障がいに対応、配慮したマニュアル、情報誌	3
・学校や支援施設などが運営するポータルサイト	2	・なし	$\cdots 1$

③聴覚障がいのあるお子さんが日常生活でよく使う情報伝達ツールは何ですか?(複数選択可)

•LINE	11	・LINEやFacebookのビデオ通話	8
•FacebookやInstagramなどのSNS	4	•zoomやteamsなどのテレビ会議	9
•YoutubeやTikTokなどの動画	10		

⑨聴覚障がいのあるお子さんが使いづらい情報伝達ツールは何ですか?(複数選択可)

•FacebookやInstagramなどのSNS	1	•特になし	1
•Web掲示板	4	・まだ使いこなしていないので今のところない	2
・LINEやFacebookのビデオ通話	2	・わからない	1
•zoomやteamsなどのテレビ会議	3	•電話	1

⑩ 聴覚障がいのあるお子さんにとって災害や防災に関する情報を入手するために便利だと思われる(実際使っている、いないにかかわらず)ツールは何ですか?(複数選択可)

・市・区のホームページ	3	•FacebookやInstagramなどのSNS	5
・学校や支援施設の先生からの情報	11	YoutubeやTikTokなどの動画	7
・一般的な防災アプリ	3	・LINEやFacebookのビデオ通話	8
・聴覚障がいの子や人に対応したアプリ	6	•zoomやteamsなどのテレビ会議	7
•I INF	11		

団 今回の防災講座に参加して、お子さんの防災の関心は高まりましたか?

・やや高まった …6・かわらない …1・わからない …8

② 今回の防災講座に対する保護者様のご意見やご感想をお聞かせください。(自由記述)

- ・1人で行動することが増えているので、その場合どうすればいいか等を指導してほしいです。(高校)
- ・今まで支援施設での防災訓練に参加した事はありましたが、聴覚障がいのための防災講座があるというのは無知で一般的な防災の知識 程度でした。もう少し意識しないとという気持ちになり、より知っておきたくなりました。改めて家族でも防災について話し合う機会に なったと思います。(小学校低学年)
- ・講座を受けてみて、親も気づかないことがあったので、親ももっと意識を持って子どもと話をしないといけないなと思いました。 (小学校低学年)
- ・動画を見た時は、子どもも少しは防災について考えた様子だった。そして自分が実際に何処に避難するのか、避難経路は?など今まで話してなかったので、家族で話し合い、実際に防災訓練を家族で行おうと思いました。(小学校低学年)
- ・災害時の集合場所について確認できたのでよかった。同い年の子が亡くなったと聞いて死にたくないと呟いていたのでどう行動すればよいか親子で考えるきっかけになりました。(小学校低学年)

※()内は子どもの学年

? 聴覚障がいのある子の防災体験(防災のチカラ)

2022年3月13日(日) 対面 うめきた外庭SQUARE(大阪市北区)

第二期工事完成後は防災公園として整備されるうめきたエリア。

災害時を想定した様々な体験や学びの場を通じて大都市災害への備えを固めることを目的に3月12日(土)、13日(日)の両日開催された「防災のチカラ」(当団体が制作、運営協力)において、デフアカデミーに在籍する聴覚障がいのある子たちが校外学習の一環で会場を訪れ、当日参加者50名と共に災害時を想定した炊き出し訓練に参加しました。

"みんなでCOOK&SHARE! 防災クッキング"

ライフラインが使えないことを想定し、屋外で炭火とプロパンガスを使用した炊き出し訓練を実施しました。 日本防災士機構認証防災士の出水眞由美さんから、災害時に起こり得る食環境の変化と備えについてのお 話のあと、非常食の定番「アルファ化米」と家庭で常備している冷凍食材や乾燥野菜を使ってドライカレーを 作る手順を料理研究家の南井由希子さんから学び、調理の過程を見学。出来上がったアツアツのシーフードパ エリアを実際に試食しました。

このほか、消防服の着用体験や防災絵本のパネルシアターなど場内をくまなく回り、手話や筆談を交えて 一般参加者とも交流の機会を持ちました。

こうした防災イベントに参加することで楽しみながら防災の知識を得ることができますし、屋外で心地よい時間を過ごしながら熱心にメモや動画を取る姿が見られました。イベントの様子を後日レポートにまとめ、映像と共に他の生徒たちにも共有されます。





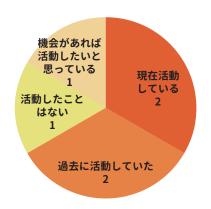




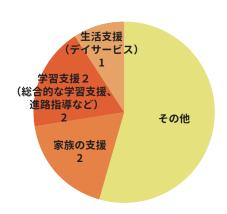
聴覚障がいのある子の保護者、支援者へのアンケート調査結果

聴覚障がいのある子や若者を支援している(していた)個人、団体(法人)に対し、 日頃の活動を通じて防災教育に関する意見を聴取しました。[回答総数9件]

●聴覚障がいのある子と若者に対する支援活動をされていますか(されていましたか)?(複数選択可)



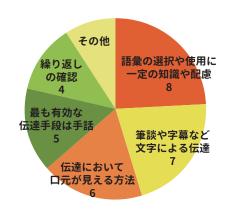
②聴覚障がいのある子と若者に対して取り組んでおられる(おられた)分野、または 今後活動してみたいと思われている分野をお教えください。(複数選択可)



【その他】

- ・聞こえない子どもたちが社会に出るために必要なスキルの獲得 (コミュニケーション力、企画力の向上、ロールモデルとの出会いなど)
- ・手話×エンターテイメントを通しての手話や聞こえない人についての 知識の普及
- •防災の啓蒙
- ・情報保障の観点から災害時の情報伝達のお手伝いをしたい。
- ・逆にそうした若者からも学べることは多いと思うので聞こえる人、聞こえない 人が一緒に楽しむことが当たり前の世の中になったらいいな、と思います。
- ・防災行動の啓発

③聴覚障がいのある子と若者への情報伝達や教育活動に際し、配慮を要するとお考えの 点があればお教えください。(複数選択可)



【その他】

- ・手話のわからない子もいるので手話や字幕、視覚的情報などのさまざまな方法 があるといいかと思います。
- ・聞こえの違いや情報獲得方法の違いなどは様々なので、個人個人にあった方法 であることが望ましいが、それがその個人以外にも役立つものだとなお素晴らしい。 (例:見てわかる情報だとお年寄りや子どもにもわかりやすい。など)
- ・絵記号等の使用により直感的な伝達手段が望ましいと考えます。

②学校での避難訓練以外に聴覚障がいのある子や 若者に対する防災教育の機会は必要だと思われますか?

【その他】

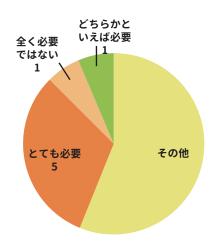
- ・伝わっているかどうかの確認をこまめに行う。
- ・ながらの説明はしない(常に話者のみに注意が向く必要がある)。
- ・わかったときはOKポーズ、わからない時は手で×を表す、など あらかじめルールがあるとお互い伝わった感覚があって良い。。
- ・オンラインで何か作業をしてもらう場合、声が聞こえないため 終わった時の合図タイマー表示があると便利かと思います。
- ・実際の見本を見せてから作業をしてもらう方が子どもたちもイメージがつきやすいです。
- ・視覚的な情報を出す場合、漢字にある程度ルビがあるとみてわかりやすいのと、イラストもあるとよりイメージしやすいと思います。
- ・UDトークを使う場合、話している内容がワンテンポ遅れて表示されることになるので少しゆっくり目に話すといいと思いますが、 あまりにもゆっくりすぎると逆に読み取りにくくなると思うので、アナウンサーのような感じで話すとUDトークも読み取りやすく なったり口もわかりやすくなるかなと思います!
- ・別途必要というよりかは、様々な人と同じ機会に、同じだけの情報を獲得できる仕組みが必要だと思う。 そして、地域には様々な人がいるってことを地域の人達に知ってもらう機会にする必要がある。



- ・怖がらせるばかりの防災訓練では子ども達が萎縮してしまうため、楽しくイメージしやすい内容とする。 とくに体験を通して身につける事で、自分達にも出来ることがあるという自信をもたせてあげたい。
- ・周りの人に気づいてもらいやすくするために、普段から聞こえに関することを発信しておくことが必要で、どういう支援があれば安心 か自分で考えて発信してもらう。
- ・障がい者ごとに理解度が違う。Helpが言える(伝えられる)ように。
- ・辛抱強く、粘り強く。
- ・楽しく・気軽に・面白く等、防災の堅苦しさをどう取り除くかの配慮が大切と考えます。
- ・後天性の人と生まれつきの人は違うということを学びましたので、私たちが思う以上に言葉や文章は生まれつきの人には伝わりにくい のだというのを踏まえ、最小限のワードでいかに効果的に伝えるか、が必要なのかな?と思います。
- ・分かりやすい&覚えやすい「行動」を植え付けるのではなく、「なぜ」その行動なのか?の説明&理解が重要。なぜなら、「その時、自分の頭で考えてベターな行動をする」必要があるから。

6その他、ご要望やご意見があればお書きください。

- ・通訳の方の確保が難しい現状があります。
- ・講座に先立ち、通訳との事前打ち合わせが必要な場合があることと、通訳用に事前に原稿をお願いするかと思います。
- ・このような活動にすごく興味があります!
- •子ども達が積極的に、楽しく防災に取組めると良いと思います。



聴覚障がいのある子の命を守る防災の今後に向けて

「災害は誰にも平等にやってくる」

そんな思いを胸に様々な年代の方々に向けた防災講座を実施していますが、今回聴覚障がいのある子どもに向けた防災講座、ましてやオンラインでどこまでしっかり届けられるのか?正直小さな不安を抱えて講座の日を迎えました。

しかし、いざ講座がスタートするとその不安は一瞬で払拭されました。

画面越しに見せてくれるとびっきりの笑顔や、熱心にメモをとる真剣な姿は、まさに水を得た魚のようでした。

その時感じたのは、私たち大人はもしかしたら、様々なハンデのある子どもたちを"災害弱者"とし、周囲がサポートすべきという一方的な考えから、ある意味本人への教育機会を奪っているのではないだろうか?という点です。もちろん、サポートをしていくことは大切でありますが、だからと言って本人の防災力向上の機会を奪うこととは違うと考えます。

もちろん一人一人のハンデによって、伝え方や使用するツールに配慮は必要ではありますが、大切なのは"誰にも分け隔てなく届ける"ことだと思います。

「防災コミュニケーションブック」(発行:田中手帳株式会社、写真)を例にすると、ろう者であり、デフアカデミーで先生をされている方からは、全てをひらがなにするのではなく、漢字とルビ付きの方が読みやすい、伝わりやすいという意見も頂きました。

また、連絡先を書く欄に携帯電話の番号は必要ないと考えられがちですが、通話以外にショートメールを送ることでコミュニケーションを取ることができるので必要だといった、当事者だからこその気づきをいただきました。



「災害は誰にも平等にやってくる」。だからこそ、誰もがしっかり学ぶ権利があり、お互いを理解し支えあう必要があります。この事業を通じて聴覚障害のある子たちが主体的に防災に関わることができる機会を広げていきたいと思いました。

(一財)大阪市コミュニティ協会 都市コミュニティ研究室 主任研究員 出水 季治 氏 (日本防災士機構認証防災士)

警察庁では、聴覚に障害のある方など、 音声による110番通報が困難な方が文 字や画像で警察に通報するためのツー ル"110番アプリシステム"を運用して います。

アプリのダウンロードは 「110番アプリ」で検索

https://www.npa.go.jp/ bureau/safetylife/110/app/



あとがき

中央区フィランソロピー懇談会(CFK)は、企業、NPO、学校、個人が集まり、地域密着型の社会貢献を目的に活動している任意団体です。特に東日本大震災後は、この大惨事を風化させてはならないとの想いを「忘れへんで、あの日あの時」というメッセージで防災、減災活動を継続してきました。

そして、この活動は私たち大人だけでなく、未来を担う子供たちが主役にならなければと考えるようになり、更に障がいのある方たちに想いを馳せるようになり、情報格差が大きいことも知りました。 そんな時に、「ママコミュ!ドットコム」さんとの出会いがあり、聴覚障がいのある子どもたちの命を守る活動に共感し、共催に名を連ねさせていただきました。

私たちが一番大切にしているのは、「つながりをつむぐ」ということです。

防災、減災活動も訓練だけでなく日常、平時から多様な人たちと関わりつながって、そしてこのつながりをつむいでいくことにより、一人ひとりの命を守ることにつながると思います。

さぁ、小さなつながりをつむぎ、誰一人取り残さない社会をめざしましょう。今この場から・・・・。

中央区フィランソロピー懇談会(CFK) 石黒修

2021年春から、聴覚障がいのある子が直面する災害時のリスクを探り、災害時の適切な避難、行動に導く有益な情報を届けるため、大阪府内の聴覚支援学校の先生方や聴覚障がい児、保護者、支援者の方々と防災の専門家・実践者を交えて意見交換を重ねてまいりました。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、学校に出向いた形での防災教育活動を非接触のオンライン学習に変え、今年2月には聴覚障がいのある子(小学校低学年9名、高学年4名、中高生2名)15名に対し、計3回の防災講座を開講しました。講師1名(聴者)、手話通訳1名(聴者)、コーディネーター1名(ろう者)と子ども、保護者が防災ゲームやクイズを通じて楽しく防災を学んでくれました。

聴覚障がいのある子どもたちへの防災教育の様子を間近でご覧いただいた先生から、「ろう者、難聴者当事者の中にも、防災の専門家を育てる必要があると感じた」というコメントをいただきました。

子どもたちからも「防災についてもっと学びたい」という言葉を直接受け取ることができました。 我々は防災の専門家として、聴覚障がいのある子とご家族、支援者の皆さまに安心を届けられる活動 を続けていきたいと思います。

ママコミュ!ドットコム 代表 出水 眞由美(日本防災士機構認証防災士)

「聴覚障がいのある子の命を守る防災」活動マニュアル

発行:2022年3月 主催:ママコミュ!ドットコム 共催:中央区フィランソロピー懇談会(CFK) 助成:大阪府福祉基金

